発達障害は狂気か
―フーコー『狂気の歴史』を含む種々の狂気に関する著作に寄せて―

林 桂生 Keisei HAYASHI(防衛省陸上自衛隊関西補給処(宇治駐屯地))

1 はじめに

本発表で明らかにしたいのは、発達障害は狂気か、すなわち発達障害者は発達障害ではないマジョリティ（定型発達者）によって狂人とみなされるか、それなら発達障害者は社会においてどのように受け入れられるべきか、あるいは社会は発達障害者というマイノリティをどのように受け入れるべきか、といったことである。

デュルケムの「共同意識」あるいは「集合的感情」、ブランケンブルクの「自明性」、もっと簡単に言えば、国家から小さな集団まで汎用できる岸田秀の「共同幻想」、こういったものが発達障害者には欠けていると思われる。共感能力の不足から、所属する集団の成員が前提としている種々の概念を共有しにくいのである。ハンス・アスペルガー（1944）は、後にアスペルガー症候群として知られることになる症例に関する論文で、「健常児が必要な社会的習慣を身につけるのは、意識的に気づいてではなく、他から本能的に学ぶ（…）こうした本能的関わりが、自閉症の子供たちは阻害されている」（アスペルガー 1944/1996:120）と指摘している。

本発表では発達障害は狂気か、発達障害者は狂人なのか、という点に考察を加え、身近な職場にいる発達障害者への対処の仕方の例を解決策として模索する。

2 発達障害と狂気の背景

2. 1 発達障害について

本発表では、発達障害者支援法第二条の定義の「自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害その他これに類する脳機能の障害」のうち、DSM-5（アメリカ精神医学会「精神疾患の分類と診断の手引」第 5 版）による Autism Spectrum Disorder（自閉症スペクトラム障害または自閉スペクトラム症、以下 ASD）にあたる「自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害」と、「注意欠陥多動性障害」（ADHD）に主に焦点を当てる。

2. 2 病跡学における狂気

『狂気と歴史』の序言においてフーコーは、「十八世紀末に狂気が精神病として制定されてしまう」（フーコー 1975:8）と述べ、赤坂（1986）は「狂気または分裂病の歴史」という一節でフーコーを簡潔に要約している。狂気または分裂病ということは狂気イコール精神分裂病[1]である。また、松本（2019）は、病跡学においては統合失調症のヘルダーリンやゴッホを論じたヤスパースと、ヘルダーリンの影響を受けたハイデガーのおかげで「統合失調症中心主義」が維持されてきた（松本 2019:23-27,282）と指摘し、それに抵抗したドゥルーズが統合失調症のアントナン・アルトーよりも今ではアスペルガー症候群だったと言われるルイス・キャロルについて論じている点に言及する（前掲:299-306,348）。

一方、病跡学の観点からウィトゲンシュタインやイェイツ、ラマヌジャンらについて論じているマイケル・フィッツジェラルドは、キャロルに対する「われわれの心に残るのは、『アリスの不思議の国』の異様さではなく、われわれの自身の奇怪な理解不能性である」（フィッツジェラルド 2008:389）という評価を引用しつつ、次のように述べる。

> HFA／ASP（引用者注：高機能自閉症およびアスペルガー症候群）でない人々にとって世界が理解不能であったなら、HFA／ASP の人々にとってはなおさらそうであるだろう。あるレベルで、このような作品は世界の理解不能性をわれわれに示している、あるいは際立たせているのである。（前掲:389、傍点引用者）

発達障害者は少なくともその「世界の理解不能性」を表現することは可能であり、現代において発達障害者が世界の理解不能性を何らかの形で表出した場合、それは周囲の人間に狂気とみなされるのか、という問題が本論の主眼である。

フーコーが、「提出されると早速もう棄てさられた」（フーコー 1975:218）と指摘する 18 世紀の「狂気の分類にかんする若干の例」（前掲:215）に以下のようなものがある。

> ヴァイクアルト『哲学的な医学（フィロゾフイッシェ・アルツト）』（一七九〇）
> （一）精神の病（ガイステスクランクハイテン）

[1] 2002 年に日本精神神経学会により「精神分裂病」という病名が「統合失調症」に改められたが、本発表では引用文献の記述に従って旧病名を用いる場合もある。

一　想像力の乏しさ

二　想像力の激しさ

三　注意不足（不安定ナ注意力）

四　執拗で片意地な反省（過度ノ注意力ト深イ省察）

五　記憶力の欠如（忘レヤスサ）

六　判断力の欠如（判断力ノ欠陥）

七　愚かさ、頭のにぶさ（想念ノ欠陥、ソノノロサ）

八　頭脳の異常な鋭敏さと不安定(活発デ早熟デヒドク活気ノアル想念)(前掲:218)

概括すれば一、二、四、八は明らかにASD、三、五はADHDの特性である。ASDにおいては他者の意図を察することができない点で「想像力の乏しさ」、そしてそれゆえに被害念慮に至るほど他者の思惑を推測しすぎる点などで「想像力の激しさ」が併存するという見方もできる。四は中枢統合性の弱さから細部にのみ注目してしまう点や「こだわり」に合致するとも言え、また、六、七は、知的障害はなくても予想外の状況に瞬時に対応できないADHDにも言語性IQの高いASDにも、定型発達者から見ればそのように映るという意味では当てはまる。つまり、今で言うところのASDやADHDの者がいたとしても、近・現代において統合失調症であるとされてきたように「精神の病」の中にひとくくりにされたであろうし、そもそもこれらは18世紀に熱心に分類された「狂気の諸形態」（前掲:219）の一例である。また別の分類ではこれらの症状は躁病やメランコリーとともにまぎれもなく「狂気」とされたであろう。

3 発達障害者の「狂気」

3. 1 発達障害者の「狂気」

《だれでも、どうふるまうかを知っているはずです。だれもが道筋を、考え方を持っています。動作とか人間らしさとか対人関係とか、そこにはすべてルールがあって、だれもがそれを守っているのです。でも私にはそのルールがまだはっきりわからないのです。私には基本が欠けていたのです。（ブランケンブルク 1971/1978:74）

何か、自分には理解できていないことがある―この感覚は止むことがなく、どこへ

行こうと必ずつきまとってきた。かなりのことが理解できているときでさえ、必ず、何かしら解釈できないものが残っているのだった。物ごとの成り立ち、筋道、相互の関係。どうしてもわからなかった。(ガーランド 1997/2000:19)

前者は『自明性の喪失―分裂病の現象学』の分裂病患者アンネ・ラウの言葉であり、後者は高機能自閉症者グニラ・ガーランドの自伝の一節である。アンネ・ラウと同様、現代であれば発達障害が疑われたであろう症例は、R.D.レインの『ひき裂かれた自己―分裂病と分裂病質の実存的研究』における二十歳の大学生「マリー」の症例にも見られる(レイン 1969/1971:210)。

確かに発達障害の特性は統合失調症の症状と類似する点もあり、さらに医師個人の日常生活の判断基準に合わない理解不能性があれば分裂病(質)と診断されたであろう。そして前述のように分裂病は狂気とみなされてきた。発達障害も、統合失調症との誤診の歴史を経た現代においてもなお統合失調症と同じく狂気と扱われ、同様に差別される素地はあると言える。つまり、発達障害者は狂人とみなされ得る。

3. 2 発達障害者の「世界の理解不能性」の語り方

我が国の発達障害当事者の語りを見てみよう。

普通にしていても、何をしても、「変」と言われました。どうすれば普通にできるのかわからなくて、こうすると普通だよ、と教えて欲しかったです。そんなことを教えてくれる人はいないので、私は同級生たちの言動をよく見て真似て、「普通に振る舞う」研究をしていました。(高橋 2008:64)

(…)私には「聴覚過敏」があり、うるさい場所では、話をしている人の声が聞き取りにくかったのです。この「うるさい場所」とは、他の人からすれば、そんなにうるさくない場所なのです。

例えば、教室内がテスト中でも「うるさいな」と感じていました。(…)一斉に走り始める「鉛筆の音」、テスト用紙を「裏返す音」、外の「車の音」など、たくさんの音が聞こえてくるのです。とても、テストに集中できるような状態ではありませんでした。(南雲 2008:76)

これらは「狂気」であろうか。前時代の医師や、現代でも勉強不足の医師や発達障害の台頭をどうしても認めたくない一部の研究者にとっては、自分の判断基準に合わないのであるからそうなのだろう。だが、いじめを受けた発達障害者の生い立ちも感覚過敏などの特性も、今では発達障害に関する複数の文献等で目にすることのできる事実である。

問題であると思われるのは、さらに重度の障害特性である。「私は、両親というものがどういうものなのか、まったく理解していなかった。人には普通、両親は一組しかいないもので、両親との関係は一生続くことになっているだなんて、考えたことがなかった」（ガーランド 1997/2000:44）と記しているガーランドは、幼い頃、その両親が喧嘩をするたびに姉が仲裁に入るのを不思議に思っていた。

> （…）私は姉が大好きだったから、姉が苦しんでいるのは辛かった。でも、事はあまりにも理解不能で、うるさかった。それに、ひとたびアルファベット・カードを持って別の部屋に入ってしまうと、そこは違う世界だった。ということは、居間で起きていることはもう存在しないのだ。自分の目から見えなくなったものが、まだ続いているはずはない。だから、部屋を出て行くということは、私にとっては、二人のけんかを仲裁するのと同義だったのである。（前掲:50、傍点引用者）

別稿でも論じたが、やはり成人してから「最近になって、父親という概念を知った私は、少しずつ彼との関わりを自分から持つようになりました」（ニキ他 2004:166）と言うアスペルガー症候群のニキ・リンコは、竹中（2008）も「『見えないものは、ない』という明快な原則から出発する自閉症スペクトラムの人」（竹中 2008:50）と引用している。

本発表に思い至った直接のきっかけは、インターネット上でも一部無料で公開されている田村由美のコミック『ミステリと言う勿れ』という、大学生が様々な事件に関わる推理小説的な作品の中で、この「見えないものは、ない」という認識が連続猟奇殺人犯の犯行動機となっていることである。あらすじは以下の通りである。

失踪した姉の最後の足取りが日曜の昼間の路線バスで途絶えたため、その弟と従兄弟達は、毎週決まったメンバーである 5 人の乗客の中に姉を連れ去った犯人がいるのではないかと見当をつけ、バスの運転手に協力を依頼してバスジャックを試みる。（大学生の主人公は、間違えて発車間際のバスに無理矢理乗り込んだために巻き込まれた。）

だが犯人は乗客ではなく運転手だった。失踪事件の夜、運転手は終点到着後に持っていた酒を口にするまで、持病の悪化で車内で気絶していた被害者に気づかず、急ブレーキの衝撃で倒れた被害者を死亡していると誤認する。セリフを引用する。

> 「全員降りたと思ってたのに　衝立で見えなくて　しかも死んでたんですよ　病気か何かで　困りました　確認を怠ったのはまずいし　酒が入ってたのもまずい　仕方ないので　いったん死体を草むらに隠して　バスを車庫に戻し　夜中に取りに行って山の近くに埋めに行きました
> 埋めたらなくなります　見えなくなればOKです」（田村 2018:84）

この後は明らかに異常者であるようなセリフによってその後の連続殺人の動機が示される。同じページには、「見えないものは、ない」という最初の姉の殺害のきっかけともども全く理解不能であると言わんばかりの被害者遺族である弟の無表情のカットが描かれている（前掲:87)。

4 考察

重度の障害特性ゆえの、周囲の定型発達者から見て明らかに理解不能であるような行動は、説明と周囲の納得を要する。だが重度でなくても、その当事者の周囲の人間が理解不能であると感じるならば、その都度の解説はやはり必要である。まして、その発達障害者の一見わけのわからぬ行動が発達障害者にとっての世界の理解不能性に起因しているのならば、特に職場等においては当事者・非当事者双方の懸け橋となるような者あるいは部署があることが望まれる。

前時代的な分類及び病跡学の新たな知見によれば、アスペルガー症候群をはじめとする発達障害は優に狂気に含まれる。その理由は定型発達者から見れば彼らの基準には当てはまらず、理解不能だからである。だが、発達障害者にとっては定型発達の世界も十分に理解不能である。端的に言ってしまえば、我々の課題はまず互いの理解不能性、つまりそもそも理解不能であるということと、どの点が理解不能であるかを明らかにすることである。当事者・非当事者相互の通訳の必要性については、本発表筆者は以前下記のように論じた

（林 2016[2]）。

（…）障害者職業センター等の「お役所」に限ることなく民間の機関やNPO法人等によってでも、企業全体が気軽にASD啓発の研修を受ける機会、そしてその当事者個々の特性を周囲の人達が十分に理解する機会を設けることはできないのであろうか。（…）ASD 当事者が所属する企業には、公的機関か民営かを問わず専門職がいる団体による研修を義務づけ、ASD 啓発がごく当然のことと受け止められるような風潮を作るべきである。

何とか勤務はできても非当事者側には予想もつかない場面で困難に遭遇する勤労中高年ASD者に対して、（…）前述のように研修の開催と平行して、同じ社内の理解者をただ一人でも二人でもとりあえず企業側は配置すべきである。

4 年たった今もこの主張に変化はない。だが省庁はごく少数の職員にではあるが、障害に関する研修を受講させるという形で理解者を増やそうとはしている。民間企業もこれに倣えば、少なくとも職場においての理解不能性はわずかずつでも解決に向かうのではないかと思われる。引き続き今後の課題であると考える。

参考文献

赤坂憲雄（1986）「物語としての精神分裂病」別冊宝島53『精神病を知る本』JICC出版局、pp.11-51。

ハンス・アスペルガー（1944）「2　子供の『自閉的精神病質』」ウタ・フリス編著（1991）冨田真紀訳（1996）『自閉症とアスペルガー症候群』東京書籍、pp.83-178。

グニラ・ガーランド（1997）ニキ・リンコ訳（2000）『ずっと「普通」になりたかった。』花風社

高橋今日子（2008）「学校でも、職場でも、いじめられたけど……」高森明、木下千紗子、南雲明彦、高橋今日子、片岡麻実、橙山緑、鈴木大知、アハメッド敦子『私たち、発達障害と生きてます―出会い、そして再生へ』ぶどう社、pp.62-68。

[2] 電子書籍のため固定ページ番号なし。

竹中均（2008)『自閉症の社会学―もう一つのコミュニケーション論』世界思想社
田村由美（2018)『ミステリと言う勿れ』第 2 巻、小学館
南雲明彦（2008)「読み書きがうまくできない困難さが、学校では―」高森明他　前掲書、pp. 74-80。
マイケル・フィッツジェラルド（2004）石坂好樹、花島綾子、太田多紀訳（2008)『アスペルガー症候群の天才たち―自閉症と創造性―』星和書店
ヴォルフガング・ブランケンブルク（1971）木村敏、岡本進、島弘嗣共訳（1978)『自明性の喪失―分裂病の現象学』みすず書房
ミシェル・フーコー（1972）田村俶訳（1975)『狂気の歴史―古典主義時代における』新潮社
ニキ・リンコ、藤家寛子（2004)『自閉っ子、こういう風にできてます！』花風社
林桂生（2016)『自閉症カフェの挑戦〈1〉：阪大自閉症スペクトラム（ASD）カフェの記録・勤労中高年 ASD 者のエスノグラフィー』Amazon Services International, Inc.
松本卓也（2019)『創造と狂気の歴史　プラトンからドゥルーズまで』講談社
R.D. レイン（1969）阪本健二、志貴春彦、笠原嘉共訳（1971)『ひき裂かれた自己―分裂病と分裂病質の実存的研究』みすず書房